

4つのメッセージ：キャリアとは能動的主体的に生きること

キャリア・リソース・ラボ代表 花田光世

先日、私の研究会（ゼミ）の卒業生で、ある電機メーカーの人事部門で仕事をしている方が久しぶりにゼミにこられました。私は毎年、卒業していくゼミ生にメッセージを送っているのですが、このOBが私が出したメッセージを自分の手帳に入れて、時々目を通してという話をお聞きしました。卒業生が社会に出て、つらい時、苦しい時、少しでも元気になるきっかけになってもらえればと思って、毎年発信しているメッセージですが、その話をきいて素直にうれしく感じました。

最近授業をしながら考えたことがあります。「もし私が、学生の皆さんに私からの最後のメッセージを送るとするならば、いったい何を送るだろうか」という問題意識です。見栄や格好をつけてもしょうがないし、本当に伝えたい私のメッセージとは何だろうかという私自身への問いかけです。そして私が思ったことは、卒業生へのメッセージがその答えに近いのかもしれないということでした。

今回、私が卒業生に送った4つのメッセージを、皆さんと共有したいと思います。私は「キャリア」とは能動的主体的に「生きること」、ワークライフインティグレーションの軌跡と定義してきました。このメッセージは、その「生きること」に対しての私の基本スタンスであり、キャリアデザインと実践に関する考え方です。

◆人間力発揮によるプロフェッショナルへの道（2002年2月のメッセージ）

みなさん最後の横浜の授業で、私の教育、そしてメタコンピテンシー・人間力の話をしたのを覚えていますか？私の教育は皆さんに知識を伝えるということよりも、皆さんに場を提供することにあるとお話をしました。そしてその場を活用して、皆さんが、皆さん個々の力で生き抜く力を身につけていかれることを大切に思っているとお話をしました。その生き抜く力がトータルな人間力です。コンピテンシーで表現するとメタコンピテンシー、あるいはキャリアを自己責任で全うしていく力がキャリアコンピテンシーと提起しました。覚えていますか？

この人間力の定義には色々なものがあります。私が重視している力は：

- 自らをストレッチし続ける力
- 自己動機付けできる力
- 逆境にあってもチャンスをつくる力
- オープンマインドであると同時に自分の価値観、志を大切に行動できる力

と考えています。これらの一連の概念は自分の成長に対する能動的なアプローチです。しかし、その能動性とは、単に肅々と自らをステップバイステップで高め続けるということではありません。むしろ自分の力を次のレベルに高める、自分が自分でつくりあげてしまった殻をやぶり、質的に異なるレベルに自分をストレッチできることと、私は想定しています。次の自己動機付けとは、仕事を行う際に自分の好きな仕事だけを選び、その分野の領域に関して自己動機付けをし続けるということではありません。むしろ自分

自身の変容を促す際、自分自身の価値観をも変えていく姿勢と捉えています。つまり、自己動機付けの本質は、自分の殻を破るために自分自身を動機付けることができるか、あるいは自分自身のバリューと必ずしもマッチするとは限らない仕事に対しても自己動機付けができるかどうかが重要と考えているのです。

そして三項目目のチャンスをつくりこむ力を説明したいと思います。仕事がうまくいっている時、回っている時、過去の成功体験をベースとしてチャンスをさらにつくることは日常的に私たちが実践していることです。それは比較的対応しやすいことでしょう。しかし苦しい時、左遷されたとき、逆境にあるときこそ、その中からどのようにチャンスをつくりこむか、それが自分自身の強さであると考えています。研究会にお招きした実務家の方々のお話を覚えていますか？お二人とも実は不遇の状態や左遷といわれているような状態にあった時こそ、自分の真価がとわれるというお話をされておられました。私はそれこそが人間力発揮のチャンスと考えています。そして最後の Integrity/志です。自分の殻を破り、苦しい局面を打開して能動的に生きることを可能にするためには、仕事に対して、自分自身の志、自分らしさを形成する真摯な姿勢が重要と考えます。その姿勢が最後に述べた、自分自身へのこだわり、Integrity です。

皆さんには是非社会に参加してからこの人間力を発揮しつづける社会人であって頂きたいと願っています。それが生涯学習、生涯現役につながり、企業においても Learning Organization を構築する基礎となるものと考えているのです。もうひとつ、専門性という言葉に関して、私の考え方を述べたいと思います。専門性は重要です。専門的な知識やスキルは仕事を進めていく上で重要な武器になります。でもプロフェッショナルという概念を考えてみると、それは専門的スキルと同レベルではないと考えています。単なる専門的な知識やスキルを保有しているからプロフェッショナルとよばれるということではないのです。私がプロフェッショナルに何を求めるかというとその専門性を発揮できる本当の人間力をもっているかどうかです。この力がないと残念ながらスキルの発揮はできないと考えています。このようなスキルや知識を現場で発揮させる基となる力、それが人間力に他ならないのです。その人間力がないと単なる専門スペシャリストで終わってしまいます。皆さんには是非、専門スペシャリストを超えてプロフェッショナルになっていただきたいと考えています。

先日、ある勉強会で民法第 644 条が話題となりました。委任に関する議論でした。第 644 条では事務処理に関する善管注意義務が問題となっています。いわゆる弁護士や公認会計士などの専門プロフェッショナルの仕事では、単に仕事を規定に基づいてこなすだけではその役割を果たしたことはありません。受任者へ委任ノ本旨ニ従ヒ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ委任事務ヲ処理スル義務ヲ負フ。とあります。要はプロの仕事は単に仕事をこなすだけではなく、善良なる管理を行わなければいけないということです。あるアウトソーサーが給与計算の仕事をしていました。発注先からきた指示ではある部門の残業が全員ゼロであり、それに基づいて給与を計算し、明細票を送付しました。ところが発注先からクレームがきたのです。この部門では恒常的に残業が発生している。それは過去何ヶ月かの仕事をみれば明確であり、当然プロの、そして専門性のあるアウトソーサーならその部門での残業がゼロというのはおかしいという判断をすべきであり、そのためにプロに対して高いお金を支払っているのだというクレームです。要はこの善管義務はプロであればあるほど、プロとしての総合的な責任、配慮が必要になってくるということに他ならないということです。スペシャリストは指示に基づいて、スキルを発揮して仕事をすればいいのですが、プロは違います。自分で課題をしっかりと構築でき、そして自らの能動的な対応を仕事の中に創りこむことが必要となるのです。このような力を発揮させるには仕事に志をもたない限り、対応は困難であると考えているのです。

授業の中でワークライフバランスからワークライフインティグレーションが重要という話をしたのを覚えていますか？仕事と生活は別物、そのバランスをどうとるかという発想からは、仕事において「志」という考え方はなかなかでてこないと考えます。仕事への想い、志があって始めてワークライフインティグレーションが可能となってくると思うのです。皆さんには人間力、そしてプロフェッショナルそして、ワークライフインティグレーションの意味を、社会に出てからも問いつづけていただきたいと期待しています。

ます。黒澤監督の生きるという映画の中で、志村喬が「命短し」という歌を、自分が努力して作ることでできた、小さな小さな公園のブランコに乗って、夜一人で歌います。最初は官僚の立場で杓子定規に住民の公園設置の訴えに耳を貸さないのですが、自分の命が短いという局面に向き合ったとき、本当に人間力を発揮して公園をつくることに成功するのです。このような力を発揮することのできる人が、だれからも信頼される人です。皆さんには皆さんがこれから参加し、構築するそれぞれの場で、人間力を発揮して、信頼される自分の人生を生きるプロフェッショナルになっていただきたいと、心から願っています。ご卒業おめでとう。そして新しいチャレンジの場への参加を歓迎します。

◆心にしみこむ支援忘れないで（2004年のメッセージ）

みなさん私の今までの講義や日ごろの言動で私が何に力を入れて、何を大切にしているかおわかりいただけているかと思えます。皆さんには、自分のありようを振り返り、気づきを忘れず、そして日常の新たな発見に喜びを見出していきたいとメッセージを発信してきました。私はそれを本当に心から望んでいます。皆さんは私がどうして、ここまでというか、「生き抜く力」「トータルな人間力」にこだわるのか不思議に思われるかもしれません。でもそれが実社会に出て皆さんを大きくする重要なエネルギー、力にほかならないと考えているからです。知識やスキル、技術力皆重要ですが、それだけでは力を発揮することはできません。それとこの人間力がともに力を発揮しあったときに大きな力と、エネルギーとなると考えているからです。

私のもうひとつのこだわり。自律と自立です。授業の中でも、自律思い込み症候群、何度も繰り返し強調した言葉ですが、社会に出てからも、忘れないでいただきたいと思っています。自律しなければ、自己実現しなければならぬという思い込みから自分を解放し、あるがままの自分を受け入れることも大切な自律とお話をしてきました。あるがままの自分を受け入れ、そこから自分をストレッチしていくことは、開発（かいほつ）というパラダイムを重視するということにつながると提起してきました。開発とは自分の中にある多様な可能性に自分で気づき、それを実践しストレッチしていくことです。多様な可能性というプラス面も、悩みや不安の原因となる自分の弱さもそれをあるがままに受け入れ、それに気づき、そこから自分をストレッチしていくこと、それが自己実現しなければいけないという強迫観念から自分を解放することに繋がります。この開発は、自分を否定せず、受け入れながら、自分をストレッチしていく能動的なアプローチです。しかし、その能動性とは、アグレッシブに新たな知識や力を獲得し、取り入れ、自分を大きくしていくということとは考えていません。むしろ自分の力で、自分が自分でつくったとらわれという殻をやぶり、新たな自分らしさの気づきと実践を行うことであると考えています。それがストレッチです。

。。。。

皆さんには単に自分の外的なキャリアを高めるキャリアアップという生き方を目標にするだけでなく、自分自身の中にある、自分の生き方を大切にすることをキャリアストレッチという生き方も重要な目標としていただきたいと思っています。いつかどこかでキャリアアップが行き詰ったとき、挫折した時、キャリアストレッチが皆さんを支えることになると思います。40代、50代、60代、ライフキャリアの後半戦になればなるほど、このキャリアストレッチが重要となります。アップの世界とストレッチの世界の二つがあることを心のどこかに置いていただければと思います。

。。。。

皆さん、飲み薬、はら薬、目薬、い薬、しみ薬、はな薬ってわかりますか？何をいつているか、さっぱりわからないでしょうね。コミュニケーションの対応の処方薬です。自分が弱気の時、相手をむしろ「飲み込もう」とするように強気に行動することが欲あります。でも、それはちっとも問題解決にはならない。はら薬というのは、弱気の時「はらを割って」話しあえる、あるいは傾聴してくれる人を欲しがちだけど、

それは自分の弱さの現われ。世の中傾聴・傾聴の傾聴ブームですが、それは逆に相手があつての受身対応です。では目薬ですが、目薬は目に入るだけで・目に映るだけで安心できる関係。その人の雰囲気・存在がかもし出す安堵感。そこにはその人の人格やいままでの行動全体がしっかりとインプットされており、それが見えることにより、安心できる関係です。それにはその人の行動や存在を形式知化し、可視化することが必要となります。ではい薬は？い薬とはそこにいるだけで落ち着く人。見えなくても、存在観を感じさせる人。無理に可視化しないで、形式知化しなくても、その人の醸し出す雰囲気がいやしの場をつくるような、そんな存在観です。それにはその前からの信頼関係があつて初めて可能となる状態です。見返りを期待しない支援、セルフエフィカシーの支援、自分を受け入れてくれる安心感、それが信頼関係を構築する要件なのでしょうね。そしてしみ薬。相手の心の中に「しみこむように」体全体にしみこむように入っていく影響する薬、そんな薬を処方できるといいですね。目薬、い薬、しみ薬は、いずれも信頼関係を構築する薬。そんな薬の役割を果たせることができると人間関係も、安心して深まることができすよね。そして最後は「はな」薬。卒業生の皆さんが社会に出て困ったり、方向性を見失ったり、不安に思ったり、支援に徹する私を思い出していただければと思います。メールをくれたり、ゼミに遊びにきてくれたり、それが「はな」薬になればと期待を込めて表現してみました。疲れた時のコミュニケーションでは、そこにいるだけ、目に入るだけで安心するようなそんな関係を構築していきたいですね。

先日ある会社の幹部社員の研修のコーディネートをしました。「部長・課長は何もできない」と逃げに上がっていることがたくさんあります。上がだめ、組織がだめ、仕組みの運用がだめ、風土がだめ、さりとて自分には権限もない。だから何もできないということばかりに目がいつてしまっていることがたくさんあります。でも、こういう質問をしてみました。入社したときの直接の上司を覚えていますか？厳しく、かつやさしく接してくれた上司のことは？自分の学校時代（小学校～大学）の先生は？自分の所属したクラブのコーチや監督の方々は？などなどです。どんなに短い期間の付き合いであったとしても、困難な状況の中でも一生懸命対応してくださった先輩や上司は必ずおられ、心に残る先輩や上司として記憶されているはずですよ。

それはどうして、どうして心に残る方かという、その方々が一生懸命何かをつたえようとしたから。しがらみや世間的を超えて、何か大切なことを一生懸命伝えようとしたから心に残っているからなのではないでしょうか。見返りを期待しないで、個の成長に一生懸命になってくれた人生の先輩の方々はできない、自分にはできないを連呼はしていないのです。できないという状況のもとでも、心にのこる上司は必ず何かを残してくれています。皆さんには、社会に出て、このような人生の先輩になっていていただきたいのです。何を完成した。何を達成した。何を残したかという、成果を出し続ける上司も大事です。会社の発展に寄与する上司も大事です。でも心に残る上司は、目薬、い薬、しみ薬の力を発揮する上司です。社会に出て行くと、実績を出さなければならぬし、何をしよう、これをしようが目がそちらにいつてしまうのもわかります。でもちょっと一息ついて、まわりをみわたり、相手の気持ちを察し、相手の心に残る活動・行動をすれば結果はついてくる。そう思つて行動してください。

ご卒業おめでとう。

◆自然体と感謝の心を忘れないで（2008年2月）

皆さん、まだ早いのですが、ご卒業おめでとう。以下私からの皆さんへのメッセージです。皆さんが生き急いで疲れたとき、自分の成長を感じられないと嘆いているとき、自分自身に自信をもてず、不安でいっぱいになった時、このメッセージを思い出してください。

私も今まで、随分変わったことをしてきました。産能大で国際経営研究所の所長をしていた時、台湾の生産力中心という組織で、ODコンサルタントの育成を手がけ、47名のコンサルタントを育成しました。

その折、いろいろ台湾でしか会えない方や、専門的な研究をされておられる方々とお会いさせていただきました。一人記憶にまだ残っている方は、台湾の高僧です。1985年頃、今から20年以上前ですが、当時の私は「気」に興味を持っていて、外気・内気の両方を研究していました。日本ではやや、外気に対する興味が強いようですが、私はむしろ自分で自分に気を入れる内気に興味を持ち、いきついた方がタイからこられたこの高僧でした。気とは何かという、いわば禅問答でしたが、要は感謝することが出発点という話でした。他者に対しても、自分に対しても感謝の気持ちを持つこと。そこから、いい気が出てくるので、生きる力とエネルギーは感謝からというお話でした。外気を出すにはエネルギーがいるし、大変に疲れ、外気を活用した治療では、何人も診ることはできません。しかし、内気は別。無限の力で自分を元気にすることができるとおっしゃっておられました。

少し前、ある方とお話をしたとき、朝起きた時、花田さんは、自分自身に「さあ、がんばろう」とエールを送ることから始まるか、「今日もありがとう」のどちらから入りますかとたずねられました。私が何と答えたかは別問題として、「今日もありがとう」の方が「自然」のパワーですよという話でした。そのとき、ちょっと飛躍するのですが、台湾の高僧の話がさっとよみがえりました。つまり、感謝が自然に出ること、これがパワーなのだという、自然体論です。内気は自然を実に重視します。動物の自然体を研究し、その自然の姿から入るのが内気でも太極拳でも採り入れられています。

自然、自ずから然り。あるべき姿をそのままにもつことの重要性です。自分の多様な可能性を信じて、自分を受け入れ、その多様な可能性を啓発していくことの重要性。またその支援が教育の本質という話は授業の中でも何回もしましたね。それです。どんな自分であってもその自分を受け入れ、その自分に感謝し、自分を愉しむこと。そこが出発点です。自分に感謝し、自分を愉しむというのは一見きれいごとですよ。でも私はどんな人でも、どんな場面でも自分を見失いためには、修羅場であればあるほど、大事なことだと思います。私が大学の助手時代、重度障害を持たれた方々の自律支援を行っていたことは、もしかして授業の中でも話したかもしれません。車イス生活、しかも自分で車イスを操作することもできない方々。完全に視力を失っておられる方々、その方々の自律支援です。でも彼ら・彼女らから本当に多くのことを学ばせていただきました。その方々は自分の障害に関してあきらめています。そして受け入れています。自分の置かれた状態をあるがままに受け入れています。何度も話をしていますが、あきらめるとは明らかに極めること。自分の限界を極め、知り、受け入れ、そこからどうすれば、その部分を補完できるかを真剣に考えることです。それがないと、重度障害の方々の自律はありえません。自ずから然りであればあるほど、自立ではなく、自律でないと、彼ら彼女らは生きていくことはできません。そして、自分の限界を知り、仲間や身の回りの人を信頼し、自分ではできないことを任せる。そこから新たな人間関係が生まれ、信頼関係が生まれ、一人ではできないことができるようになると私は考えています。

でも皆さんは多分、「さあ、がんばろう」かもしれませんね。生き急いでいるのかもしれませんね。自分で何もかもと思っておられるかもしれませんね。でも、それは少し自然と違うのかなと、あらためて考えてみました。もしかして、「さあ、がんばろう」は自分のどこかに無理を生じさせることかもしれません。メンタルヘルス問題での支援で、「がんばろう」は禁句とよくいわれます。私が、昔お世話になった、産能大で教えていただいた言葉に三ムの精神があります。最近の三無は「無気力」「無関心」「無感動」ですが、経営の現場における三ムとは「ムリ・ムダ・ムラ」で、その排除が能率学・マネジメントの本質と教えられました。特に「無理」とは設定目的が到達する手段の能力を質・量ともに上回ること。ムダは逆に到達目標に対して、手段の能力が上回ること。そしてムラとはこの無理と無駄が混在する状態です。要するに目標・目的と手段が標準とよばれる自然状態でつりあっていることが能率の極致です。やや長い引用ですが：

「能率」とは、「標準に従うこと」である。無論その標準は実際に達し得るものでなければならぬ。たとえばここに百人乗りの客車がある。それに百人乗ってあれば、その状態は「いれもの」と「中身」との一致した有様である。百人をいれるために作った車の中に、百人乗っておれば、それは、いれもの（形式）と中身（内容）との一致した場合であって、それを能率というのである。その車はもともと百人を乗せるために作ったものである。その事に百人乗っているとき、その事の本来の目的は十分に達せられたのである。この場合、この事は百人乗りであるときめるときは「標準を作った」といい、その人数を「標準」と名づけ、車や学校の場合にはそれを「定員」と称する 出典：『経営者の自己革新』 上野陽一著 産業能率大学

ここで、私がよく語るストレッチングを考えていただきたいと思います。成長は自分のできるところより、少し高めの目標を設定し、チャレンジをしてもらうということが出発点と一般的に考えられています。さらに私は能動的に節目を自分がデザインして、そこにストレッチすることが重要と述べています。そこで無理を考えてみてください。無理にストレッチを起こすのではない。無理にチャレンジをするものでもない。自分のもっている、しかし発揮していない多様な可能性や力を活用して、目標に向かうこと。この意味をかみしめたいと思います。無理をおこさず、ストレッチすることは自分の自然の状態、多様な可能性を駆使することから可能となります。標準・自然・ゲシュタルトの世界です。うつ症状の典型とも言われる新三無の状態(無気力、無関心、無感動)が、無理というその状況から引き起こされる可能性は極めて示唆的です。一般的な表現ですが、「うつ症状」の方に「がんばろう」は禁句です。それはその人に無理を強い、心の安定性を壊し、不安感を増殖するからです。むしろストレッチングは、その方々がもっている「うつ状態の原因ともいわれている自分の過度なこだわりの世界」とは異なり、むしろ自然なバランス状態をベースとした対応と考えてみてください。「自分の自然の状態が壊れたとき、「自分が何もができないと思ひ込み、全て否定的な感情、考えをもってしまう状態」に進みます。ベックは1960年代にうつ状態の「自分自身に対する否定的な考え：自己批判」「世の中に対する否定的な考え：悪い面を見る」「将来に対する否定的な考え：絶望」という三つの特徴を抽出しましたが、要は個人を否定の世界にむけて一押しすることが無理な「がんばろう」に収斂することになります。

それでは、「がんばろう」ではない支援とは、一体どんなものなのでしょう。繰り返しになりますが、ストレッチングでは、実は自然の状態の理解が重要と考えます。「自然：自ずから然り」、それは単に今の現状に安住することではなく、自分もっている多様な可能性に気づき、それを発揮すること、それが実は成長であり、自分自身のストレッチングであるということを理解したいと思います。授業の中で、自分が大切に思っているバリューがどうしても大切なのかを理解する際、「どうしてもそれが大切なのか」を3回繰り返して自問したとき、新たな自分のバリューの発見、気づきにつながるというエクササイズをしましたよね。新しく発見されたバリューは、新しいものでも何でもなく、自分が持っているものの中からの気づきでした。それがバリューのストレッチングであり、アンラーニングであり、自分自身の成長に他なりません。そこから入ることが自然を通したストレッチングだと思います。私はそのストレッチングを可能にするための、自己の自然の状態に対する支援ということにこだわりたいと思います。

人生を愉しむことも、この自然の状態と関係してきます。愉しむとは、元気な個人の回復です。元気への支援とは、悩み、不安になり、方向感を失った方を単にゼロベースにもどすだけでなく、生き活きとした前向きな気持ちになっていただく支援です。不安は実は消えません。不安があっても能動的な第一歩を踏み出すことが重要です。不安があっても、悩んでいても一歩踏み出すには、この自然の状態に向かっての自分の行動開発だからこそ踏み出しやすいと考えます。そして、そのときのポイントが愉しむにあると

思っています。自然の自分とどう向き合うか。多様な可能性を持った自分を受け入れ、それに気づき、その発揮に自分を駆り立てる、それがストレッチングです。

ご卒業おめでとう。皆さんのこれからの新たな自分自身の発見と楽しみ探しに大いに期待しています。

◆タイムマシンがほしい？（2009年2月）

皆さんへの卒業プレゼント、何がいいですかね。難しいですね。あるお医者様は、プレゼントにタイムマシンが欲しいなと思ったそうです。大学病院に勤められるそのお医者様は、大学病院の若い医者の卵の方々に、最新医学の進歩の話がされている中で、プレゼントにタイムマシンがあったらなおっしゃられたという話でした。それは最先端の医学の進歩に直面し、15年前、20年前にその技術や薬があれば、あの時の患者さんの命を救えたはずであり、タイムマシンがあれば過去に戻って、患者さんの命を救ってあげることができるからだというお話だったそうです。それは現実的に無理であり、だから今、できる限り、患者さんに、一生懸命最先端のサービスの提供を行うことが重要なのだということを、このお医者様は若い医者の卵に伝えているということでした。若い医者の卵の方々に「医学の進歩は速い。それと同時に患者さんの命は重い。」だから、医者はその速さと重さを常に肝に銘じておくことが重要だというメッセージを出しておられるとのことでした。

それでは私自身だったら、何をいまプレゼントに欲しいかを自ら聞いてみました。私は常に新しい知識や、実践メカニズムを求めています。また自分の実践活動を改良、工夫をし続けています。パワーポイントひとつ見ても、ひと月まえの見た目には同じようなパワーポイントのスライドも、微妙に変わってきていたりしていますよね？新しいものを構築し続けるということは、では古いものを伝えた人たちに対する責任は？という問題もあります。ですので、多くの研修ベンダーはいったん、販売してしまったパッケージをなかなか変更したり、修正したりすることができません。

でも私たちは常に今、多くの方々と接して生きています。サービスを提供しています。今接している方々に自分の考えるベストのアイデアや方策を一生懸命お伝えする責任と義務があると思います。要は私の気持ちはこのお医者様と同じということです。私たちは常に今、多くの方々と接して生きています。サービスを提供しています。今接している方々に自分の考えるベストのアイデアや方策を一生懸命お伝えする責任と義務があると思います。一生懸命新しいものを取り入れ、それを今の方々にお伝えしないと、むしろ過去接した方々に申し訳ないし、今接しておられる方々にも申し訳ないという気持ちです。

中途半端なことや、流す人生を送ってしまったら、以前接した方々に申し訳ない。できれば、もどって、この新しいアイデアや方策をお伝えしたい。でもタイムマシンではないし、昔にもどって歴史を変えることはできない。そういう現実と私たちは向き合い、今を生きているのだと思います。前述のお医者様の最新のサービスを提供するにあたって、「速さと重さを肝に銘じる」というのは、私自身の問題意識でもあります。そうでないと皆さんに申し訳ない。

そうなると、私が欲しいものはタイムマシンではないかもしれません。そのような最先端のアイデアや方策を常に語り続ける機会であるかもしれません。でも昔出会い、そして関係が切れてしまうと、その語り続ける機会が閉ざされてしまいます。タイムマシンの代わりに私がほしいもの、それは皆さんと継続的に語り合い、私の問題意識をお伝えし、アイデアや方策をともに考えるという機会だと想うのです。私たちみんなが、その気持ちを持ち続ければタイムマシンは必要ありません。私がいま卒業される皆さんにプレゼントとして差し上げるのできるもの。それはこの皆さんに、この気持ちを持ち続けていただきたいという想いを伝えることです。「自分自身が能動的主体的に生きることは出会いの場を積極的に持ち続け、創り続けることに努力しつづけてください。」このメッセージが皆さんへのプレゼントです。ご卒業おめでとう。

以上 4 本のメッセージいかがでしたか？対象者が異なる、毎年発信するメッセージなので、ダブっている部分が多少ありますが、社会に出ていきっていくにあたっての心得といったところでしょうか。マニュアルでは伝えられない、キャリアデザインと実践の基礎となる心得を、卒業していく学生さんにメッセージとして発信したものです。しかし、このメッセージは社会人の皆さまにも、生活の原点にたちもどっていただいて、ご自分の日常の振り返りのお役に立つものではないかと考えています。ポラーエクスプレスの車掌（トム・ハンクス）、はクリスマスエクスプレスという夢の列車から降りた主人公の少年にこう言いました。

It doesn't matter where you are going, the matter is deciding to get on.

生きていく力としてチャンスをとりに行く重要性を語ってくれた言葉です。

生きていく力として、もうひとつのメッセージをご紹介します。若くして肝臓がんで亡くなった、バーチャルリアリティの世界的権威、カーネギーメロン大学のランディ・パウシュ氏が最後の授業で学生たちに語った言葉です。彼は古代の哲学者セネカの言葉を引用し、「**幸運は、準備と機会がめぐりあったときに起こる**」と講義しました。この能動的に Luck を取りに行くアプローチを、私は、Planned Happenstance の **Luck is no accident** につながるものと考えています。そして、パウシュ氏は一連の Luck を取りに行く準備に対する「心得」の重要性を「人生をどう生きるか」という最終章で熱く語っています。

彼の言葉を私なりに整理すると：

1. 自分に夢を見る自由を与え、夢をあきらめず、楽観的になり、ひたむきに取り組み、全ての瞬間を愉しみ（原文は楽しむ）、最初のペンギンになる（**能動志向**）
2. 格好良くあるよりまじめであれ、誠実であれ、思いやりの心を持ち、謝る時はここから（**インテグリティ**）
3. 不満を口にせず、自分の常識にとらわれず、自分に値しない仕事はないことを知る（**オープンマインド**）
4. 他人の考えをきにすぎないで（**自分の価値基準を持つ**）
5. チームワークの大切さを知り、人の一番いいところを見つけ、相手の視点に立って発想し、信頼は双方向であることを知り（原文は忠誠心）、ありがとうを伝える（**人とかかわる力**）

となり、これらはいずれも生きていく知恵としての人間力の表現に他ならないと考えます。そして、彼は自分が精いっぱい生きる証しとして、障害・障壁をどうとらえるかという考え方をメッセージとして強く協調しています。「**レンガの壁がそこにあるのには、理由がある。僕たちの行く手を阻むためにあるのではない。その壁の向こうにある「何か」を、自分がどれほど真剣に望んでいるか、証明するチャンスを与えているのだ。**」

多くの方々が、自分が大切にしたいメッセージを残したいと思う時、そして自分がどうしても伝

えたいことの本質を考える時、いかに生きるかという「心得」の世界に踏み込むことになるのではないのでしょうか。少なくとも私はそう考えます。それは生きる本質と呼べるものかもしれません。皆さんに繰り返しお伝えしていますが、私はキャリアを「生きる」という視点で考えています。だからこそ、キャリアアップのためのマニュアルではなく、キャリアストレッチを実践していく、生きる知恵としての心得を重視しているのです。今、2010年もまさに終わろうとし、2011年が始まろうとしています。しかし私たちのキャリアの実践を通して「生きる」という活動には年の区切りはありません。それは継続的なチャレンジであり、生命の火が消える直前まで続く、私たちの生きている証しであると考えます。

パウシュ氏は、自分の人生の最後の授業で、自分が夢を追うだけでなく、他人の夢の実現の支援の重要性を語りました。私が大学院時代に学んだ南カリフォルニア大学で強く影響を受けた先生のお一人に Leo Buscaglia 先生という方がおられます。その先生が、*Living, Loving and Learning* という著書の中で、

Ideal teachers are those who use themselves as bridges over which they
invite their students to cross, then having facilitated their crossing,
joyfully collapse, encouraging them to create bridges of their own.

と述べておられます。一人ひとりの皆さん方が自身の夢に向かって踏み出し「生きる」ことに、側面からお手伝いすることが支援であり、その重要性を認識することが、キャリア教育の担当者としての心得であると考えています。

2010年12月30日